
——Blood Blade Online——

害虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

——Blood Blade Online——

【Nコード】

N4182X

【作者名】

害虫

【あらすじ】

一条恭介は過去に黒い歴史を持つ、少し一般人とは違う人生を歩んできた高校生。そんな恭介には誰からも愛してもらえず、唯一の心の拠り所はチャットサイトで偶々出会った夏野優輝の存在。一方、夏野優輝は学校以外の時間のほとんどをゲームに費やすという、根っからのゲーマー。そんな優輝が恭介に勧めた、『Blood Blade Online』をプレイしていると突然ゲームの世界へと……。交差する世界の中で、最後に辿りつく場所とは——？

ただトリップするだけではつまらないので、稚拙ながら少し

違う設定にしてみたいと思っています。応援していただくと、執筆意欲も湧くので是非よろしくおねがいます。

一条恭介——？（前書き）

執筆させて頂きます、害虫と申します。
よろしくおねがいます。

一条恭介――？

――一条恭介は歩いていった。

寒さによってその身を枯らし、歩道に無造作に植えられている木々。それらを横目に身ながら、恭介は身を震わせながら歩行を続ける。

枯れてしまった木々は、冬を過ぎればまたその葉を青々と生やす。いくら年月が経とうとも、その光景はすぐには変わっていかない。そろそろ、本格的な冬の到来といったところだろうか。焦げ茶色の枝を、冬の寒波を乗せた風が吹き付けた。

吹いた風は、僅かに露出している恭介の顔面に容赦なく襲い掛かり、その寒さに恭介は顔をしかめた。

いくら冬用の服を着ているといっても、その寒さを全て防ぐ事は出来ない。深めに被ったニット帽を更に手で引き伸ばし、目が見えていないのではないかと思うほどに、顔を覆わせた。マフラーで首の辺りを丁寧に防護し、その下は厚めの黒のパーカー。下はジーンズを履いている。

恭介は時々吹き付ける寒風を凌ぎながら、秋葉の街をそれこそ隠れるようにして歩いていく。遊歩道に植えられている木は、誰の目に止まることなくまるで空気の一部とでも化している。恭介もそれに習うように、一言も発せずただ黙々と歩いていった。

秋葉の街はこの寒さであるにも関わらず、何か異様な熱気に包まれている。

チェックのシャツをズボンの中に入れて、リュックを背負いバン

ダナを付けている、いかにもな男が目にとまった。

一体、この男はどんな人生を歩んできたのだろうか。恭介はそれを考えると、無性に腹が立った。

何で、こんな奴が。

何で、僕が。

そんな黒い念に囚われるのも一瞬のうち。それはすぐに、自分の中のできた心に打ち消されてしまう。どうせ、どうせ。恭介は半分諦めていた。この男がどんな人生を送ってきたのか。そんな事は、自分に関係の無い事だ。この男に限らず、自分よりも恵まれた人生を歩んできた奴なんて、ざらだ。

恭介はそう考えると、すぐにその男の事を頭から打ち消した。

活気に溢れた街を歩いていると、自分の暗い思考をいくらか紛らわせる事が出来る。それに気づいたのは、つい最近だった。根本的な解決にはならないかもしれないが、恭介はそうやって自分を騙す事で、ある種の安心感を得ていた。

この街は恭介の唯一落ち着ける場所と言っても良かった。決して、恭介の趣味と合う場所ではない。恭介はこの街の至るところに開かれている、メイド喫茶には何の魅力も感じない。ガラスケースの中で貴重に扱われている、無駄に顔が整ってスタイルの良い水着姿の女のフィギュアにも、何の関心も無かった。

ただ、この街の活気が気に入っているだけなのだ。

自分を鎮めてくれるこの街を、恭介は気にいっていた。

恭介はふと、歩行の速度を緩めた。

可愛い女の子の宣伝の旗が立っている電気屋。そこに、サンプルなのだろうテレビが置いてあった。バラエティを映す訳でもなく、それには堅苦しいスーツを着て眉根に皺を寄せているニュースキヤスターの顔が映っていた。

画面右上には《どうする？ 止まらない若年層の犯罪》というテロップが流れていた。ニュースキヤスターがコメンテーターに話題を振っている。

何の事件に対してなのか、恭介にはさっぱり分からなかったが、コメンテーターは悩ましい顔をして、ありきたりな言葉を言った。

『そうですね。やはり、教育の問題なのではと思いますね。いわゆる、ゆとり世代と言われるこの時代で、子供達は甘い社会を学んでしまったのではないかと思います。この傷害事件もそうですが、巷で溢れかえる万引きも然りです。少年法によって守られている子供達は、何かをしてしまっても、社会が守ってくれるというのを知っているんです。だからこそ、危ない事でもやってしまう。』

確かに、勉強以外にも大事な事はたくさんあります。それを学んでいくのが、社会に生きる者の勤めでしょう。しかし、だからといって甘やかして何でもやらせてしまうというのはおかしい気もしますね。現代の子供達には、まず人としての勉強をして欲しいと思いますね』

いかにもそれらしい言葉をつらつらと並べたコメンテーターに満足したのか、ニュースキヤスターに再び画面が移る。

犯罪を起こすのに、年齢は関係ない。教育なんて全く関係ない。犯罪を起こすか、起こさないか。殺すか、殺されるか。それは全てその人が持って生まれた運命だと、恭介は感じた。コメンテーターの上面だけの言葉は、恭介を再びいらつかせるには十分だった。

暫く、その後のニュースを見ていると、恭介を客と勘違いしたのか店の中から店員が出てきた。

「テレビをお探してでしょうか？ それならお店の中に今話題の、高画質テレビを取り揃えておりますが」

店員はニコニコと営業スマイルを浮かべながら、恭介ににじり寄った。今の時代、家電製品は長持ちするものが多くなってきた、中々買い換える人が少ないのだろう。売れ行きこそ下降気味だが、一つ当りの単価は、携帯電話やゲーム機器よりも遥かに高い。店側としては、そんな数少ない客を逃すわけにはいかないのだろう。

しかし、生憎のところ恭介はテレビが欲しいわけではなかった。恭介は小さく「すいません」と謝ると、足早にその場を立ち去った。

後ろから、店員の少し嘲りと憎しみが混ざった視線を感じたが、また新たな客を見つけたのかすぐにあの張り付いたような笑顔に戻っていた。

恭介は腕に付けている時計をチラリと見やる。午後四時。

秋葉の街はこれからがピークだった。これぐらいの時間帯から、一気に人が増える。今テレビで話題の人気アイドルグループのコンサートを見に来る人、仕事帰りのサラリーマン、漫画やパソコン、

アニメのグッズを買いに来た中高生、様々な人が溢れかえっていく。

活気があるのは良いのだが、恭介はそんな人混みに紛れていくのはあまり好きではなかった。何よりも、息苦しいし居心地が悪い。特に目的も無く、ただ彷徨っている恭介にはなおさらだった。

あんな、仮想のものの何が良いんだか。

恭介には、この街に来る人々の思考は理解出来なかった。恭介は僅かに見える狭い視界を、時計から周囲に向ける。

半ば強引に、メイド服を着ている若い女に連れて行かれる四十過ぎと思われる中年の男を見かけた。何が良いのか、女は男に上目遣いを使ったりして気を引こうとしている。

それが接客とは分かっていたものの、恭介は内心、その女が滑稽に思っていた。

本当に、この世界は面白い。恭介はキラキラと光り始める街のネオンが鮮やかに空を彩っていく様子を見つめていた。

そして、人が多くなってきたのと同時に、恭介は自然にこの街から離れていった――。

途中、やはり自分のように電気屋の店員に捕まったのか、同じぐらいの年齢の男の子が店の中に入っていくのを見た。自分の意識というものが無いのだろうか。流されるままに、自分の人生を歩んでいて、何が楽しいのだろうか。

いや、そもそも人生を歩んでいくことの何が楽しいのだろうか。

娯楽？ 恋愛？ 友情？

そのどれもが、自分とはかけ離れすぎている。これらのものが何なのかは恭介には理解出来なかったのだが、直感的に全てが自分とは違うというのは認識する事ができた。

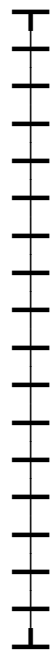
また、寒風が恭介を襲ってきた。僅かばかりに聞こえていた雑踏も、今はもう聞こえない。秋葉の街からは既に離れている。

恭介は自分が住む場所へと歩みを進めていく。

そして、実感した。この寒風と、独特の気分の高揚は、もうすぐ冬本番が訪れる事の前触れだと。

————七回目の冬がやってきた。

一条恭介――？



恭介は自分の家に帰ると、静かに玄関のドアに鍵を差し込んだ。金属製のドアは珍しく、その光沢を余すことなく、周囲に晒している。まるで西洋の城の門のようだった。年代物なのか、所々は錆がついていてみすばらしい。

やはり鉄製の鍵を差込み、右に回転させると小さく音が鳴りドアの鍵が開いた。

重いドアを寒さで上手く動かせない手で、ゆっくりと引いた。

途端、暖かな風が恭介の頬を撫で付けた。後ろからは寒さ、前からは暖かさ。二つ同時に体感しているのは、ちょっとした贅沢だろうか。

無機質な外見とは違い、家の中は驚くほどに柔らかさに包まれている。コンクリートで出来ている恭介の家なのだが、流石に内面まで同じそれにしてしまっただけは寛げないので、中はフローリングになっている。

いきなり暖かい場所に入ったので、その温度差で感覚が麻痺してしまう。だが、これが何ともいえない。麻痺した感覚が、恭介にわずかばかりの快楽を与えてくれるのだ。

恭介は首に巻いていたマフラーを外すと、玄関脇に置いてある靴箱の上に無造作に置いた。

この寒さの中でも首ではしっかり守られていたようで、赤くなつた顔とは対照的に、白い肌を晒しだした。頸動脈がトクトクと振動するのを感じる。

恭介はほっと息を吐くと、靴を脱ぎ家の中に入る。

恭介の家はコンクリートで造られた二階建ての一軒家だ。三十坪ほどの敷地を存分に使った家で、ここに住んでいるのは恭介とその父、母。それに、中学三年生の妹が一人。家族四人で暮らすのには丁度良いスペースなうえ、恭介は普段あまり家にはいない。大体は、外に出てぶらぶらとして、平日は地元の公立高校に行っている。家にいるときは、自分の部屋に閉じこもっているだけだ。

ここは自分の家だが、自分がいるべき場所ではない。恭介はそう思っていた。だから、家族とはあまり関わりを持たないし、そんな自分にわざわざ学校の授業料を払っている両親にも悪いので、恭介は高校を卒業したらすぐに働くつもりでいた。

今日は休日。日曜日だ。妹は何処かに出かけているのだろう、家にはいない。両親は共働きで、水曜日が休日な様で日曜日のこの時間帯にはいない。

つまり、今は恭介一人が家にいるのだ。

恭介は二階にある自分の部屋に入る。リビングは暗く、テレビを見る気にもなれなかったので、やはり今日も部屋に閉じこもる事にした。

窓から見える景色にはもう既に夕日が映っている。冬になるにつ

れて、日照時間は短くなっていくのだが、今日は天気が崩れ気味だったので、日が落ちるのが幾分早い様に思えた。

五畳ほどの部屋には、必要最低限のものしか置かれていない。ベッドと、小さな勉強机。それに、ノートパソコンだ。

恭介はノートパソコンのバッテリーを繋ぎ、スタンバイになっていたのを起動させる。

すると、すぐに昨日開いていた画面が映し出された。

「やっぱり、スタンバイは便利だな」

普通に電源を切ってしまうと、次に立ち上げるときに何分も待たなければならない。恭介のパソコンは決して性能が良いとは言えないので、なおさらだ。

故に、スタンバイという機能を発見した時にはいくらか興奮したのを覚えていた。

……………馬鹿らしい。

恭介は映し出されたウィンドウの人工的な光を見つめる。

昨日開いていたのは、チャットだった。

スタンバイにしたせいで、サーバーとの接続は切れてしまっていた。

恭介はすぐに退出ボタンを押す。こうしないと、処理が上手くで

きないのか不具合が発生してしまうのを恭介は身をもって体験していた。チャットの入室画面へ戻り、再び名前を入れて入室をする。恭介はチャットでは、『藍』と名乗っていた。特に深い意味は無く、ただ単純に藍色が好きだからである。たまに、女性と勘違いされるが、その時はそのまま女性を偽って、相手を釣る。

入室すると、すぐに参加メンバーから挨拶が殺到した。

『こん』

『こんばんは』

『藍さんちーっす!』

流れるようにして、チャット画面がスクロールされていく。恭介は同じように打ち込むと、発言ボタンを押して入室者をチェックした。

いつものメンバーだ。恭介がチャットに来たのはほんの数日前。余りにも暇を持て余していたので、適当にネットを閲覧しているときにたまたま見つけたサイトだった。喋る内容は自由で、主に暇つぶしのための雑談。自分と同じような年齢の人もいれば、社会人だという人もいる。恭介は、主に会話を眺め見る事しかないが、時々偶に気になる話題になると、発言をしている。

その発言に、チャットメンバーはすぐに返事を返す。現実の世界じゃ味わえない奇妙な連帯感が、恭介をチャットにのめり込ませた。恭介には、学校で親しいと思える友人はいない。せいぜい、物の貸し借り程度の付き合いだ。恭介はそれ以上の関係は求めないし、クラスメートも恭介とそれ以上の関係になろうとはしなかった。

勿論、孤独を感じないわけが無い。自分には友人がいないという

のは、恭介の密かなコンプレックスだったが、そのコンプレックスを指摘して茶化するような奴さえ、いなかった。恭介はほとんど空気存在なのだ。

だからこそチャットは人との対話を普段ほとんどしない恭介にとって、自分を全て隠して他人になれる、いわば第二の現実だった。

『今日は何をしてたの？』

話が自分に振られた。恭介に尋ねてきたのは、ハンドルネーム《優輝》。恭介は寒さで悴んだ指を擦り合わせ、気晴らし程度に暖めると、すぐにキーを叩き出した。

『今日は学校が無かったから、いつも通り秋葉でうろうろしてた。優輝は？』

『そっかあ。僕も今日は学校が無かったから、外出してたよ。しかも、偶然にも秋葉！』

『まじで！？ 俺はついさっき帰ってきたんだけど。もしかしたら、優輝とニアミスしてたかも……』

『ありえる！ それで、恭介は何をしに行ったの？ 僕は、ちょっと今やっているオンラインゲームの特典が欲しくて、秋葉の電気屋でゲームのソフトを買ってたんだけど』

『俺は別に目的は無いよ。暇だったから、ちよつとぶらぶらして秋葉を散策してただけ。学校行ってもあんまり楽しくないしね。特に趣味とかも無いから。それで、優輝が言ってる特典っていうのは、あのこないだ聞いたゲームの？』

恭介は言ったキーを叩く手を止めた。流石に、ずっと打ちっぱなしだと慣れていないせいか、指の動きが鈍ってくる。手を両手で組んで解していく。

ペキ、と間接が小気味良い音を立てた。

恭介は、優輝の言っているゲームのホームページを勧められて一回だけ見たことがあった。何でも、今一番勢いがあり人気も話題も沸騰中のMMORPGなのだそう。恭介は、この手のゲームはやったことが無かったので、登録をしたりはしなかったが、優輝はこれにはまっているらしい。

MMORPGなのだが、今までのものよりも断然グラフィック性能が優れていて、低スペックのパソコンでも出来るというのが売り文句らしい。

優輝も初めはそれに釣られてやったそうなのだが、実際にやってみると王道であるにも関わらず熱中するのだという。

詳しいゲームの内容は、恭介は知らなかったのだが優輝はこの話題になると途端に、文に熱が籠る。文字だけを見ても、その興奮が恭介に伝わってくるのだ。

恭介が少し休憩している間にもう既に、恭介と優輝の会話は完全に流されていた。

入室している人数は恭介と優輝を含め十人。恭介は優輝との会話を徹しているが、その他の参加者は各々自分の会話相手を見つけて自由に話している。このチャットの基本的な使い方としては、入室

してすぐは、暇をしているチャットのメンバーと雑談。そこで、話が合う人を見つけたら二人での会話になるのである。まるで、ホストのようだ。

恭介は大体こうして優輝と話している。優輝は恭介と同じ年齢らしく、住んでいる場所も恭介とはそう離れていないらしい。何せ、秋葉でニアミスする程だ。何処に住んでるかまでは知らないが、恐らくは電車で行ける距離だろう。

一分後、優輝が発言をした。その言葉には何処か熱が籠っている。最近はこのゲームの話になると、やたら優輝は口数が多くなる。それほど、熱中しているということだろう。勿論、恭介はそれについては無知同然なので、知ったように相槌を打っただけだ。

『そうなんだよ！ MMORPGの《ブラッド・ブレイド・オンライン》！ 実は、これの特典で今日行った秋葉の電気屋で指定されたゲームソフトを買うと、ゲーム内で使えるレアな武器が手に入るんだよ。だから、今日はわざわざ秋葉まで繰り出したんだ。でも、その指定されたソフトが何の陰謀なのかやたら高いんだよ。しかも、そのソフトのハードを持ってないから遊べないし……』

なら買うなよ。と、恭介は突っ込みたくなったがそれを抑えて、

『そうなんだ』

と相槌を打った。

『それでね、この特典で貰った武器がそれはもう強くてさ！ さっきも試しに使ってみようと思ってログインしたんだけど、今まで苦労していた敵も楽々！ 高い買い物だったけど、やっぱり買ってよ

かったと思うよ。あ、それとさ。もし藍が欲しいなら今日買ったゲームを譲りたいんだけど』

『へー、そうか。んで、そのソフトのタイトルは？ 後、ハードも教えて』

『えーとね、タイトルは《最強モンスター育成バトル》……で、ハードはクラインかな』

いかにも面白く無さそうな名前だ。恐らくは、《ブラッド・ブレイド・オンライン》を運営している会社が販売しているゲームなのだろう。在庫処理の為に抱き合わせて売ったという事だろう。確かに、プレイヤーの多い《ブラッド・ブレイド・オンライン》の強い武器とセットにすれば、それこそ飛ぶように売れるだろう。優輝も、それに釣られてまんまと買ってしまった口だ。

まんまと会社の思惑にはまったということか。

恭介は机の引き出しを出し、その中に乱雑に放り込まれているゲーム機器を漁る。大体は、秋葉で徘徊している内に無理矢理買わされてしまった物で、その度に処分方法を考えていたのだが、いつか役立つだろうとこの中に溜め込んでいたのだ。

その数、およそ十。メジャーな機器からマイナーな機器まで一応揃えてあるはずだったのだが、どれも優輝の言っているクラインのパッケージは見つからなかった。

よっぽど、マイナーなハードなのだろうか。それとも、只単に高値だったから知らないうちに恭介が買うのを拒んでいたのか。そもそも、恭介はほとんどゲームをしないので自分が持っているゲーム

の種類を把握しきれてはいなかった。

宝の持ち腐れ。

いっそのこと、このゲーム全て優輝に譲ってしまおうか。

「――本当に、使えないな」

一条恭介――？

そう悪態を吐きながら、恭介は引き出しにまたゲームを詰め込んで乱暴に閉めた。

恭介は急いでチャットに文字を打ち込む。

『悪い。クラインは持っていないから、俺もいない』

『そっかあ。了解。じゃあ、ゲーム屋でも持っていくことにするよ』

『ああ、悪い。まあでも、ゲーム屋に持っていけばそのクソゲー臭のするもの、少しは役に立つだろ』

『うん、確かにそうだね。それじゃ、僕はそろそろ落ちるよ。早く手に入れた武器を使って、無双したいし』

どうやら、優輝は《ブラッド・ブレイド・オンライン》をするつもりらしい。一体、一日何時間やるつもりなんだろうか。聞いた話によると、優輝がこれを始めてからまだ一週間。しかし、その僅かな期間でランキング上位まで上り詰めたとの事。勿論、今日のようにわざわざ特典を買いに行ったりしているものもあるのだが、やはり技術の差だろう。

前に優輝が自慢していたのを恭介は少し聞いただけだったが、こういったMMORPGをプレイして十年近くになるらしい。

恭介には十年前どころか二年前の話題になると、もうその知識は尽きてしまう。だから、果たして十年前のそれがどういったものか、

皆目検討付かなかった。だが、本人が誇っているのならそれは胸を張れる事なのだろう。

仮にゲームの話だとしても、ゲーム参加者からしてみれば時にはそれは教師やはたまた大統領なんかよりも尊敬出来る人物に成り得る。

優輝のそういった点から考えれば、短期間でランキング上位に上り詰めるのも至難の業では無いのだろう。それに、一日十時間以上もやっていれば尚更だ。

学校に行っている時間を引けば、一日でゲーム出来る時間なんて限られているはずなのに、一体何処からそんな時間を持ってこれるのだろうか。

恭介は少し考えたが、止めた。優輝の様なゲームにのめり込んでる人の事何て、恭介には分からない。

ましてや、実際に会った事の無い人物についてあれこれ考えても只の空想でしかなかった。

恭介は溜息を吐いて、少し目を瞑るとすぐにまたチャットに戻る。

『おっけー。それじゃあ、俺も落ちるわ』

そう発言して退出ボタンを押そうとしたところで、優輝が止めに入った。

『あ、ちょっと待って!』

『ん？』

『藍もやっぱり、一緒にやらない？ 今なら、新規登録キャンペーンで低レベルでも簡単にレベルが上げられるようになってるし、フレンド登録で僕と一緒に強い敵を倒して簡単に高経験値も溜められる。藍はこういうのあんまりやってないっばいけど、やってみたら絶対に面白いから！』

恭介は少し考える。今までも、何回かこうして優輝に誘われた事がある。だから、ホームページも少し見てみた。

だが、それでも登録していないのは何となく気分が乗らなかったからだ。不慣れな上に、ゲームの知識が殆ど無い恭介にとっては、見知らぬ人と一緒に遊ぶMMORPG等、未知の領域に等しい。そんな恭介が、優輝のようなコアプレイヤーが溢れているゲームを果たして楽しめるか。

優輝に散々その魅力を聞かされていたので、恭介も少しは興味を持っているのだがいかんせん気分が乗らない。

ただ、だからといってずっとゲームをやらないと、折角出来た話し相手との会話にも付いていけない。何よりも、そんな恭介に愛想を尽かして優輝が離れていくのが怖い。今までを孤独に過ごしてきた分、優輝の存在は友達以上だった。

そんな存在を失ってしまえば、自分はこれからどうしたらいい？

また、あの時の生活に戻るのか？

「嫌だ……。そうだ、始めれば優輝ももっともって俺に構ってくれ

る……」

恭介は直ぐにチャットに文字を打ち込んだ。

『やる！ 今から俺も始めるから、色々教えて』

『ほんとっ！？ それじゃあ、とりあえず新規登録して出来たらまたチャットに来てね。僕がそこから色々と指示するから』

『了解』

——良かった。

いくら気が合うとはいえ、世間話ばかりしていたのではすぐに飽きてしまう。共通の趣味さえ持っておけば、まず話題には困らない。

そういう点で言えば、ゲームというのは正に格好の趣味だ。ゲームは多量な知識から構成されているから、話題なんて腐るほど出てくるだろう。

恭介は何で今までやらなかったのだと、後悔した。

そうだ、もっと早くからやっておけば良かったんだ。優輝は、一番信頼できる友達じゃないか。最初からこうしていれば、もっと早く仲良くなれた。

「丁度、暇してたんだよ」

画面の向こうの優輝に話しかける。

暇を持て余している恭介には、ゲームをする事でその有り余る時間を有効に活用が出来る。暇人の一種の役得だ。

そして、恭介はすぐにチャットの回線を切った。

「えっと――まずは、新規登録……っと」

恭介は検索欄に《ブラッド・ブレイド・オンライン》と打ち込む。すると、何秒もかからないうちに膨大なサイトが表示された。やはり、人気作故にヒット件数はかなり多い。攻略サイトから、ブログ、ホームページ、SNSサイト、コミュニティ……。様々な人間が、今このゲームをプレイしている様が良く伺える。

その中から、一番トップに來た公式サイトを開く。何度か見た光景。重なり合う剣と剣の周りに、まるで散りばめられた星の様に血痕がついている。全体的に黒色を基調としたデザインは、その血の赤を余計に際立たせている。何度見ても、趣味の悪いサイトだと恭介は思ったのだが、安直にこのゲームの名前からすれば仕方ない事なのかもしれない。

暫くすると、プレイ動画が再生されたが、恭介はそれを全く見ずにスキップさせる。すると、次は御馴染みのインフォメーション画面になった。

運営からの様々な情報や、公式の掲示板等へのリンク、遊び方から推奨スペックまで、細かく分類分けされたメニューが画面の右脇に表示された。

恭介はそこから新規登録をクリックする。

すると、すぐに必要事項の記入が現れた。ネットで何かをするときには、大体これが出てくるので恭介はスラスラと打ち込んでいく。利用規約に同意しますか？ というチェックボックスにチェックを入れると、ゲームIDが登録された。恭介はそのゲームIDと自分で決めたパスワードを手近にあったメモ用紙にメモを取ると、すぐにお気に入りからチャット画面を表示させる。

名前を打ち込み、入室。

恒例の挨拶を飛ばして、すぐに優輝に話しかけた。

『優輝、登録し終わったぞ。次は何すればいい？』

すぐに返信が来た。

『おお！ やつと藍と出来るねっ。それじゃあ、まずは登録したゲームIDとパスワードを使ってログイン画面からゲームの中に入るんだけど、その前に藍は初期設定を登録するんだよ。プレイヤーの名前とか、性別とか、職業とか。まあ、画面の指示に従ってれば出来ると思うから、そこらへんは詳しく説明しないけど。それで、それが終わるとゲームが始まってチュートリアルになるから、それは受けなくていいよ。時間かかるし、僕が教えた方が手っ取り早いから。いい？ チュートリアルを飛ばすと《primitive town》っていうところに自分のキャラクターが出るから、僕が行くまで絶対に動かないでね』

恭介は長々と語られた優輝の文をじっくり三回ほど読み、記憶する。

パソコンのスペックの問題で、ゲームとチャットを同時に行うのは不可能だった。なので、記憶しておかないと分からなくなってしまう。

『おっけ。分かった。んじゃ、向こうで会おう』

『はいはい、それじゃ落ちる』

その言葉と共に恭介もチャットを閉じた。

そして、もう一度サイトのトップページにいくと、さっき書いたメモを見ながら、ログインIDとパスワードを入れていった―――
|。

夏野優輝——？（前書き）

短くてすみません。

夏野優輝——？

冬の空の陽は短い。正にそれを表している様に、まだ午後の四時を回ったころなのにも関わらず既に辺りは薄暗がりになっていた。

「——はーっ、はーっ」

息を吐き出すと、それが白くなって視覚出来る。そろそろ、この格好では寒いのだろうか。夏野優輝はすっかり冬の準備を始めた秋葉の街を歩いていた。

歩いている人たちの中には、もう既に冬の格好をしている人もいる。優輝はそれを見ながら、数時間前の自分を恨んだ。優輝が出たときには然程寒くは無かったので、特別厚着をしてこなかったのだが、この時間帯になって一気に寒くなった。そんな優輝の今の格好は、長袖の白のTシャツ一枚の上に、ダウンジャケットを羽織っているだけ。下は灰色のカーゴシヤカパンだ。

一応、優輝の身体の大まかな部位は全て隠れてはいるのだが、それでも生地が薄いので嫌でもその寒さを感じてしまう。ましてや、マフラーやネックウォーマーの類をつけていないので、首元の感覚はほぼ寒さで封印されていた。

さっさと用事を済ませて帰ろう。優輝はそう思うと、足を速めた。前方から吹き付ける風が優輝の柔らかい猫毛をふわりとかきあげる。優輝はそれを煙たそうに冷えた右手で押さえつけた。この髪は、優輝が少し動くだけですぐに揺れ動いてしまう。優輝はそれが嫌で嫌で仕方が無かった。それに、ストレートで全く癖が無い髪なので、髪型は大体普通に下ろしただけになる。分け目を作ろうにも、直ぐ

にそれも直ってしまい手が付けられない状況だ。

だから、優輝はお金が貯まったらパーマをかけるつもりだ。パーマをかければ、少しは格好の良い髪形に出来る気がしていた。

優輝はポケットからシンプルな黒の財布を取り出した。

「二、四、六、八……九千円か」

優輝は札の数を数えると、それをまた財布の中にしまった。勿論、これはパーマをかける為に溜めているお金だ。近くの美容室で料金を聞くと、一万二千円と言われたのでそれに向かって優輝がコツコツと貯めたものだった。

しかし、今の優輝にはそんな事よりも大切な事があった。

「あー、もー……寒いなあ。さっさと買って帰ろっと」

人並みに流れるようにして歩いていくと、優輝は目的の店の前で立ち止まった。やたらと目を引くネオンに顔をしかめながらも、優輝はすぐに店の中に入っていく。入ると直ぐに、暖房の暖かさが身体の奥底にまで沁みていくのを感じた。

冷えた身体にこの暖かさはまるで天国さながら。優輝はしばし、その場に立ち尽くして温まっていた。そんな優輝を邪魔そうに見ながら、大学生と思われる男が店の奥の方へと進んでいった。確かに、入り口のすぐ近くで立っている優輝は他の客からしてみれば迷惑この上ないだろう。だが、一々そんな事を気にしている優輝ではない。

優輝は更にそこで何分か立ち止まって、やっとその思い足取りを

動かした。

優輝が来たこの店は秋葉でも有数の大型電気店だ。ゲームから家電製品、コアな機器まで大体が取り揃えてある。三階建ての大きなビルで、階数こそ多くは無いのだが、面積はかなり広い。優輝は慣れた足取りで店内のエスカレーターを駆け上っていき、二階にあるゲームコーナーに小走りで到着した。興奮なのか疲れなのか、少し息が切れてしまっている。

「やば。少し運動しないとなあ……」

そうぶつぶつと独り言を言いながら、優輝は目的のゲームを探す。流石に大型電気店というだけあって、その品揃えは半端ではない。有名作品しか置いていないような店では、優輝が手に入れたいゲームが売っていない。だからこそ、品揃えが良いこの店にわざわざ足を運んだのだが、品物が多すぎるというのもそれはそれで困るものだ。

探していくのが非常に面倒臭い。優輝は小さく舌打ちをすると、焦らずゆっくりとゲームのタイトルを眺めていく。RPG、パズル、シミュレーション。その他様々なジャンル、様々なハードで細かく分類された商品の棚を流れるようにして動いていく。

そして、徐々に徐々に欲しいゲームの内容で絞っていくと、今度は指でひとつずつタイトルを確認していく。探して求めているゲームのハードは優輝の持っていないものだった、というよりもそのハード自体が世間的にあまり認知されていない。このゲームを知ったときにはプレイしようかと思ったのだが、やはり優輝もハードを持っていなかった為に断念した。

「ええつと……うわっ、クラインってゲームのタイトル少なっ！
しかも無いし……」

クラインというのがゲームのハードだ。しかし、それは人気が無いのかゲームコーナーの端っこに申し訳程度に並べられているだけ。他のものと比べると圧倒的にスペースが狭い上に、僅かに並んでいるソフトも、どれもこれもがありきたりな名前ばかり。しかも、ソフトには少し埃がかかっていて長年ここから動かされていないことが伺える。

しかも、優輝が探しているゲームはここには置かれていなかった。六作品ほどしか無いので、ここからならば探すのも簡単だった。

優輝は心の中で悪態を吐くと、軽く棚に陳列しているほかのゲームを見ながら足を動かす。ゲームコーナーには余り人がいなかった。ので、何を見ようがソフトの順番を入れ替えるという地味な嫌がらせをしようが全く問題が無いのだが、今はそんな悪戯をする気力さえ湧かない。

「あーあ。近所のゲーム屋には置いてないし秋葉にも無いし。ネットはもう予約が殺到してるから無理だろうし……」

そう文句を言いながら渋々エスカレーターに乗ろうとするとところで、優輝の視界の隅にあるものが移った。

夏野優輝——？

「ん？ あれって……」

優輝は今注目されているゲームが置いてあるコーナーに目を向ける。そこには、昨日発売されたばかりの人気作。そして、その横にはあのクラインのゲームソフトが場違いにも置かれていた。

「あ、あ、やっやっぱりそうだ！」

優輝はそれに気づくと、もう途中まで降りてきてしまっていたエスカレーターの流れとは逆向きに、その段差を登っていく。ルームトレーナーの様に下へ下へと動いてゆくエスカレーターに逆らってどんどんと上へ登る。

途中で優輝の後ろから乗ってきた会社員とおぼしき男性が、まるで異質な存在を見るかのように驚いた表情で何かいいたげにしていたが、今の優輝にはそれすらも言わせない気迫があった。

やっこの思いでエスカレーターを登り終ると、優輝はすぐに注目のゲームが置いてあるコーナーに駆け寄った。そこには、他の商品よりも目立つ場所に堂々とその姿を晒している、クラインのゲームソフト。急場凌ぎなのか、全く関係の無いネオンのおかげでクリスマスさながらになってしまっている。

そして、やはりこちらにも急場凌ぎなのか安っぽい紙にマジックで、宣伝文句が乱雑に殴り書きされていた。

優輝はソフトを一つ手に取ると、安堵の表情を浮かべた。そして、

裏にしっかりとパスワードが書かれた特別な紙が付属しているのを確認して、それを落さないようにしっかりと押さえつける。

「やっと見つけた……。《最強モンスター育成バトル》ってありきたりすぎるっていうか、適当すぎるでしょ……」

優輝の持っているゲームには、モンスターのつもりなのか緑色の軟体生物がその表紙を飾っていた。背景は草原のようで、緑色が重複していて非常に見えにくい。本当にプレイヤーに買わせるつもりがあるのか、全体的にがさつな造りをしている。《最強モンスター育成バトル》という文字は、かなり太いフォントででかど書かれている。その下には、『Blood Blade Online』で使える特別な武器を手に入れるためのパスワード付き!』と印刷してある。

優輝の目的はこれだった。元々、クライン等というマイナーどころかほとんど認知されていないハードの、更にその中でもつまらなさそうなソフトに、ゲーム好きな優輝が興味をそられる筈が無い。優輝が今最もハマっているのは、MMORPGのBlood Blade Online。つまり、このゲームの特典として付いてくる武器が、優輝の本当の目的だった。

優輝はゲームを一階のレジに急いで持っていく。幸いにも、誰も並んでいなかったのですぐに優輝はそのゲームを店員に差し出した。

「これ、下さい」

「はい、少々お待ち下さい」

店員はそう言うと、素早くゲームのパッケージに表記されている

バーコードにスキャナーを当てた。一瞬で、機械に金額が表示された。

「こちらの商品、七千円になります。また、特典の商品が付いているので少々お待ち下さい」

店員はそういうと、レジの後ろに置いてあるゲームの棚から小さな箱を持ってきた。どうやら、あの紙はこれを貰うための引換券のようなもので、パスワードそのものではなかったようだ。考えてみればそれもそうだ。あんな所にパスワードを付けてしまっただけは、商品を買わずにそれだけ取られてしまうのがオチだろう。

「しかし……七千円か」

優輝は苦虫を噛み潰したような表情になると、ポケットから財布を取り出して持金を改めて確認していく。しかし、何度数えても入っているのは九千円。増えもしないし、減りもしない。いや、正確にはこれから減るのだろう。パーマのためにせつせと貯めたお金も、これを買ってしまうえば残りは二千円。また地道に貯めなければならなくなる。

優輝はここで初めて、少し戸惑った表情を見せた。たかだか、ネットのゲームにこんな大金を使ってもよいのだろうか。しかも、このゲームソフトがそこそこ面白くて、自分がプレイ出来るのならはまだ諦めがつくのだが、そのどちらにも属さないというのが問題である。

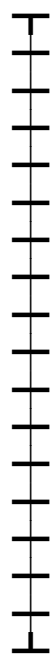
ゲームの武器一つのために、お金を出しても良いのだろうか。

優輝はしばし考えたが、店員が箱を持ってくるのを見ると決意が

固まった。

「ええい、ままよ！」

優輝は握り締めた千円札七枚と引き換えに、ゲームソフトと小さな小さな箱を受け取った――。



小さな振動を感じながら優輝は電車のシートに座っていた。もう既に辺りには夜のとばりが訪れていて、窓から見える景色には家から漏れてくる明かりと、細長い街灯の橙寄りの光がかろうじてその光景を照らしていた。

電車の中には帰宅している人が多いのか、かなりぎゅうぎゅう詰めの状態になっている。しかし、優輝は運良く空いた座席に座る事ができたので、こうして安息している訳だった。優輝はポケットから携帯を取り出し、ブックマークからサイトを開いた。『黒猫の井戸端会議』という名前のサイトで、主にCGIを使って作られたゲームや、チャットが設置されている交流をメインにしたサイトである。

優輝はサブメニューからチャットをクリックし、入室する。入室者はおよそ十人といったところだろうか。このサイトは随分前から優輝が愛用しているもので、勿論暇つぶしのために来たのだが、顔を見知っている現実の友達とは違い、気楽に話せるところが良い。

学校では、友達や教師の目にいかに自分を良く映すかに気を使っている優輝だが、このチャットではそんな事をする必要もない。

どいつもこいつも、全く知らない人間。何か自分に都合の悪い事が起きれば無視すればいいし、名前とIPアドレスを変えてしまえば、また別人になることも出来る。

何度でもやり直しの利く世界だ。優輝はその手軽さからどんどんとその魅力にのめりこんでいった。

優輝は本名で入室すると、ボタンを素早く押して挨拶をした。携帯で文字を打つのは、パソコンで打つよりも速度が遅くなってしまふ。偶にチャットで見かけるのが、携帯で打っているおかげで会話が流れる頃に返信を返す人だ。この場合は、もう既に話題が切り替わって定型な返事しか返ってこない時と、最悪全て流されてしまうのがおちだ。

だから、すぐに返信を返せるように優輝は携帯であるにも関わらず、パソコンとほとんど同じ速さで打つことが出来る。その代わり、疲労感パソコンの倍以上だ。

暫く流れ行く会話を見つめる。他のチャットメンバーの会話に入るタイミングを探しているのだ。しかし、今はどの人も大体がその相手との会話に夢中になっているようで、入れそうな話が見つからない。

そんな時、新たな入室者が表示された。

夏野優輝——？

『藍さんが入室しました』

「お……」

優輝は小さくそう呟くと、すぐに挨拶の言葉を入れて藍に話しかける。

『こん』

藍は、最近このチャットで優輝が仲良くなった人物で、ほぼ常連の優輝とは逆に、まだ来てから数日間ぐらいしか経っていない。しかし、藍は優輝と同じ年齢なうえそこそこ話も合う為、こうして話すようになったのだ。

『今日は何をしてたの？』

とりあえず、当たり障りの無い質問を投げかける。

『今日は学校が無かったから、いつも通り秋葉でうろうろしてた。優輝は？』

返信が返ってくる。それも見て、優輝は少し驚いた。秋葉といえば、たった今優輝が居たところではないか。なんと、そこに藍も行っていたらしい。

『そっかぁ。僕も今日は学校が無かったから、外出してたよ。しかも、偶然にも秋葉！』

『まじで！？俺はついさっき帰ってきたんだけど。もしかしたら、優輝とニアミスしてたかも……』

『ありえる！それで、恭介は何をしに行ったの？僕は、ちょっと今やっているオンラインゲームの特典が欲しくて、秋葉の電気屋でゲームのソフトを買ってたんだけど』

『俺は別に目的は無いよ。暇だったから、ちょっとぶらぶらして秋葉を散策してただけ。学校行ってもあんまり楽しくないしね。特に趣味とかも無いから。それで、優輝が言ってる特典っていうのは、あのこないだ聞いたゲームの？』

——暫くそうして話をしていると、不意に電車の電車のアナウンスが優輝の耳に入ってきた。大分熱中していたようで、周りの乗客は他の駅で降りたのか数が減っている。座席にもぼつぼつと空白が目立つようになってきた。

「あ、やば……」

電車がゆっくりと減速していき、やがてその動きが完全に停止した。先ほどアナウンスされた駅は、丁度優輝が帰るために降りなければならぬところだ。

『はいはい、それじゃ落ちる』

優輝は話をキリのよいところで中断させると、退出ボタンを押してチャットから出た。携帯の電源ボタンを押してインターネットとの接続を切ると、携帯を閉じてポケットに入れる。

ドアが閉まってしまわないうちに優輝はすぐに電車から降りる。すると、すぐに冬の寒さが優輝の身体を襲った。電車の中は暖房が良く効いていてとても心地良かったのだが、外に出れば一転身を引き締めるような寒さ。

「寒い……最悪……」

優輝は身体を温める事も兼ねて少し走り気味に駅から飛び出た。優輝の家があるこの街は、秋葉から一時間ほどの場所にある、伏見という名前だ。一応首都圏の範囲内であるのだが、この街だけはまるでその時代の変化に取り残されたようだった。あまり開発が進んでいないおかげで、周りには緑がかなり残っていて、まさしく都会の中の田舎といった感じだろう。

ぽつぽつとまばらに田んぼが広がっていて、その間を縫うようにして広がっている道を優輝は駆け抜けていく。

何人かの人とすれ違う。どの人もラフな格好で、のんびりと散歩を楽しんでいるようだった。

恐らくは、観光客だろう。優輝はその人達を見ながらふと考えた。

この街は比較的空気も良く、星も良く見えるため意外に観光客は多い。

それに、主要な街へも電車で行けるので交通の便も悪くは無い。特別何か特産等があるわけではないが、この街で営業している旅館はそこそこ儲かっているのだろう。

優輝は少し走る速度を落とす。冬であるにも関わらず、額からは

一筋の汗が伝ってきっていた。当初の、身体を温めるという目標は達成出来たものの、流石に疲れが出てきた。しかし、優輝はその足を止める事は無い。

汗が着ている服を湿らせているおかげで、冬風が余計に身に染みる。

これでは本末転倒だ。優輝は小さく息を吐くと、また足に力を込め一気に走り出す。

綺麗な夜空の下に、小さな呼吸音と軽いリズムを奏でている足音が響いていく。優輝は額に当たる風を心地良いと感じながら、田舎の道を走っていく。

ところどころにある民家からは灯が漏れている。この街の人口はやはりあまり多くなく、恐らくは百人程度しかない。それでもこの街にそこそこ人が見られるのは、旅館の従業員であったり、観光客であったりが多いからである。それ故に、そういった人の活動が怠惰になる朝方や、夜遅くになるとこの街は一気に静まり返る。

さっきは人を見かけたが、後一時間もすれば外を歩く人は見かけなくなるだろう。

——優輝はそんな人気の無い道を五分間程走り続けると、やがて足を止めた。

目の前に見えるのは、この街に唯一あるマンション。優輝が住んでいるマンションだ。現代風な造りをしている七階建ての物件。もちろん、賃貸だ。

優輝は元々、この街に住んでいたわけではない。

しかし、二年前に優輝の父親がこの街に惚れ込んだおかげで、夏野一家はここに引越することになったのだ。当初は、優輝と優輝の母親が反対したのだが、このマンションは数年前に建設されたもので、そこまで古くは無いうえ、母親の通勤、優輝の通学にも不便が無いため、二人も渋々ながら了承したのだった。

今となつては、この街もそれなりに過ごしやすいから不満は無いのだが、強いて言えばやはり若者にとっては何も無いというところがネックだった。

優輝はマンションの中に入ると、自動ドアのロックを鍵を差し込んで開けた。念のため、近くに誰かが居ないかを確認する。

といっても、この時間帯に出入りする人なんてほとんどいないだろう。

優輝は閉まり始めるドアに慌ててその身を滑り込ませる。

夏野優輝——？（前書き）

書き溜めておいた分が全て出尽くしました。

また書き溜めるので、少し更新が滞りますが、どうぞこれからもこの作品をよろしくおねがいします。

夏野優輝——？

マンションのエントランスには暖房こそ付いていないものの、風が入ってこないというだけでも外よりは断然良い。

優輝は袋に入れてあるゲームをチラリと見ると、エレベーターのボタンを押した。しかし、前に使った人が上の階だったようで中々エレベーターは降りてこない。

焦りが優輝の行動を急かした。

優輝はエレベーターの隣にある非常用階段へと出ることの出来るドアを開けると、そこから一気に駆け上がる。優輝の部屋は三階にあるので、今走ってきた運動量から比べれば大した距離じゃない。優輝は焦る気持ちを必死に抑えて、転ばないように階段を丁寧に、かつ敏速に登る。

そして、三階に着くと優輝は非常階段を出た突き当たりにある部屋のドアに鍵を差し込んだ。少しお洒落な模様が入っているドア。これが都会だったら、友達等に少しは自慢出来るのかも知れないが、生憎この街にはそんな事をわざわざ気にするような人はいない。

優輝は僅かな開錠音がしたのを聞くと、ドアを開けた。途端に出てきたのは、今日の夕飯であろうカレーライスの香ばしい匂いだった。下腹部の辺りがその匂いに釣られて、音を出す。

ああ、良い匂いだ。お腹減ったなあ。優輝はそんな思いと共に、今までの焦りを一時忘れていた。

そうして玄関に立ち尽くしている優輝を現実に取り戻すように、奥から優輝の母親が現れた。優輝の母親は若く、まだ三十代の後半だ。それなりに化粧もしていて、正直言うと老いを感じさせる要素はあまり無かった。

しかし、だからといって特別美人という訳ではなく、むしろ顔は整ってはいるが地味といったところだ。そして、その特徴は優輝にもしっかりと受け継がれていた。少し茶色っ気の混じった髪は父親譲りなのだが、地味な顔の印象は母親譲りだ。

玄関で立っている優輝に不思議に思ったのか声をかける。

「優輝？ そんなところで何やってるの？」

「ああ……いや、何でもないよ母さん。今日はカレーかな？」

答えが分かりきった質問だが、優輝は一応確認のつもりでそう質問した。

「ええ。今日は野菜が安かったから、野菜多めのカレーを作ってみたの。あ、でも優輝が嫌いな人参は入れてないから」

「うん、ありがとう」

優輝はそう言って微笑むと、靴を脱いで自分の部屋に入っていく。閉めたドアの向こうから、「夜ご飯、もうすぐ出来るからね」という声が聞こえてきた。

優輝は曖昧に返事をする、一息つく。

買ってきたゲームソフトを適当に放り出し、パスワードのついて
いる箱を取り出すと、優輝は机に置いてある黒いパソコンを立ち上
げた。すぐにパソコンは立ち上がり、優輝はインターネットを表示
させる。お気に入りからBlood Blade Onlineの
公式サイトに接続する。

「さてと、藍はもう登録し終わったかな？」

先ほどのチャットで優輝は藍をこのゲームに参加させる事に成功
していた。今までも何回か誘っていたのだったが、今日始めてそれ
が了承されたのだ。

藍とはこのゲームの中で落ち合うことになっている。

約束してから大分時間が経っているので、恐らくはもう登録して
待ち合わせ場所で待っている事だろう。

「あ、そういえば名前聞いてなかったなあ。まあ、でも多分分かる
よね」

優輝は暗記しているログインIDとパスワードを打ち込み、ゲー
ムにログインする。そして、デスクトップのショートカットアイコ
ンをクリックしてゲームを起動させた。

流石に、優輝のパソコンはゲームをする為に作られているのでそ
の動作は驚くほど軽快だ。

何のストレスを感じることなく、自動的に今日されたアップデー
トファイルをダウンロードし、画面が切り替わる。

黒の背景に、白銀のいかにも西洋的な剣と、赤い血で彩られている少し悪趣味なスタート画面。優輝は慣れた手つきでマウスを動かして、自分のキャラクターを選択する。

そして、数秒後にはゲームが始まっていた。

Blood Blade Onlineは、狩りと戦争を目的としたゲームだ。それぞれの所属国を最初を選び、職業等を選んで自由に遊ぶというのが大まかなコンセプトだろう。

優輝は設定を少し弄って、ゲームのウィンドウを画面一杯にまで広げる。こうすることで、より臨場感が出るのだ。

少し長めの銀髪に、切れ長な瞳。腰に携えているのは小さめのレイピアで、服装は鎧のようなものではなく、ファンタジーの中によくある凡庸な皮製の服だ。全体的にシックで軽い装備になっていて、皮服と銀髪が不釣り合いだった。

しかし、優輝はどっちかといえば見た目よりも実用性重視なので、この装備を変えるつもりはなかった。

ゲーム内の世界は《アリストテイル》と名づけられていて、画面右上に小さく表示されている。

やはり、評判が良いだけあってグラフィックは建物の細部までしっかりと再現されている。時折吹くゲーム内の風がまるで本物のように、優輝のアバターの髪を揺らしている。それを見ながら優輝は実に不思議に思う。何故、自分と同じで柔らかそうな髪質なのにも関わらず、丁度よい具合で髪がなびいてくれるのか。そんな事をゲームの問うても仕方がない事なのだが、自分のコンプレックスには人

間は目敏い様で、そんな細かなことすらも優輝は不満だった。

そんな風に思えるのもひとえに、このゲームが現実には忠実に再現されていると言えるという事だろう。

優輝はマウスからキーボードに操作を移し、キーを叩いてアバターを操作する。この時間帯は仕事帰りや学校帰り、休日で暇を持て余している人達等、様々な人がログインしている時間帯で、最も賑わっている。更に、この賑わいは時間が経つにつれてどんどん増えていく。

今優輝は、アリストテイルの中の、中心街に位置する《advanced town》にいた。前は、狩りに出かけて戻った後すぐにログアウトしたようだ。このadvanced townは一定の規制が設けられていて、ゲーム内のランキングに入っているプレイヤーしか来る事の出来ない特別な場所だ。故に、ここに居るほとんどのプレイヤーはかなりの高レベルだし、武器や防具も上級なものばかりだ。

NPCプレイヤーの商店も、他の場所に比べて質が良い。正しく、選ばれた者だけが来る事ができる場所。advanced townに来る事の出来るプレイヤー——ランカープレイヤーは、全部で三百人。そして、この時間帯に来る人も、全員ではなく、多くでも精々百五十人程度。

なので、他の街よりも幾分雑踏は少なく、比較的道にもゆとりがある。

「……………っと、こんな事してる場合じゃないや。早く藍と合流しなきゃね——」

一条恭介――？

恭介がやつとの思いで primitive townに辿りついたのは、キャラクターの登録を終えてから二十分程経った後だった。

これほどまでに時間がかかってしまったのは、プレイガイドをじっくりと眺めていたからだ。元々、こういった類のゲームをやった事が無い恭介にとって、プレイガイドというのは何よりも大事なものである。

少し慣れたプレイヤーならば、習うより慣れろといった言葉通り、プレイガイドなんてものを見るよりも実際にゲームをプレイして操作方法等を覚えるのだろう。

この Blood Blade Online は確かに優輝の言ったとおり、王道的な RPG という評判が多い。しかし、それでもここまでの人気を博しているのは、やはりそのグラフィック性能。

そして、多種多様な種族に、典型的なストーリーを補って余るほどの、探求性。

このゲームには、未だに攻略されていない未知の部分が多い。何しろ、かなり高い難易度を誇るクエストを成功させなければならぬいと手に入らない武器だとか、何万分の一の確率でしか手に入らないアイテムといったものが多々あるのだ。

出てくるモンスターも多く、携帯ゲーム機の比ではない。

こういった事は全て、恭介がプレイガイドから学んだ事だった。

つまり、大まかなこのゲームの概要だ。勿論細かなところまでは分からなかったのだが、その辺りは優輝が教えてくれるだろう。

primitive townはかなりの人で賑わっていた。どうやら、この街がこのゲームで言うところのスタート地点というところらしい。

恭介の様な新規登録者がそこら中を歩き回っている。その場所から一步も動いていないのは恭介只一人だった。

優輝の言ったとおり恭介はチュートリアルを受けていない。恐らく動き回っているプレイヤー達は、チュートリアルを受けているのだろう。

——そのまま数分が過ぎる。

すると、人の流れを掻き分けるようにして一人の男性プレイヤーが向かってくる。長い銀髪を左右に揺らしながら、規則的な足音がスピーカーから聞こえてくる。

近付くにつれて、徐々にその輪郭がはっきりしてくる。切れ長の目と、現実ではありえないほどに綺麗に整った鼻筋。しかしそれに不釣り合いな、いかにも安そうな装備。

表示されているプレイヤー名は優輝。

それを見た瞬間、恭一はやつとかという思いに囚われた。

急いでチャットウィンドウを開き、文字を打ち込んでいく。プレイガイドをしっかりと読んだおかげで、特に戸惑う事も無く操作する事が出来た。

『優輝？』

一応疑問系で聞いてみる。

すぐにチャットの返信が帰ってきた。このゲームでは、話したい相手にカーソルを当て指定すると、そのプレイヤーとのチャットを行う事ができる。勿論、全体向けにチャットをする事も可能なのだが、参加者が多いおかげで、流れてしまうため個人との対話には適していない。

そのうえ、この辺りは新規登録者の溜まり場なので、ギルドへの参加勧誘メッセージが次々と発言されている。

優輝と思われるプレイヤーは恭介のチャットに反応したのか、すぐ近くまで来ると立ち止まった。

『藍？』

同じような問いかけが来る。勿論、藍は恭介のハンドルネームであり、このゲーム内での名前でもある。恭介はその反応で断定した。

『やっぱ優輝か！ 待ちくたびれたんだけど』

『ごめん！ 本当にごめん！ 色々とごたついてて、ログインするのが遅れちゃったんだ。それよりも、僕が言った事ちゃんと覚えていてくれた』

『ああ、勿論。チュートリアルは断っておいた』

『そうそう！ 後、言い忘れちゃったんだけどさこのゲームって所属国とかあるじゃん？ その所属している国によっては入れるフィールドとかが違うんだよね。ここは、中立マップだからどの国のプレイヤーも入れるんだけど、属専用フィールドとかだと、他国は入れないとかあるんだ。僕は、エルリーオんだけどさ、もしかして藍って……』

基本的に所属国は五つで、それぞれに国の紋章が割り当てられている。優輝の所属しているエルリーオは白い盾のマークが紋章となっている。そして、その紋章はしっかりとアバターの少し上辺りにあるプレイヤー名の横に表示されていた。

更には、恭介のアバターである藍の横にも。

『そう。偶々だけど、優輝と同じエルリーオだ。良く分からないから適当に選んだんだけど。聞こうか迷ったんだけどな』

『そっかー。ごめん、そこら辺もしつかりと言っておけば良かったよ。でも、同じなら良かった。えーと、それじゃあ早速狩りに行くかと言いたい所なんだけど、藍は初期装備だよな？』

恭介は自分のアバターを確認する。チュートリアルをすれば、それなりに強い装備が貰えるのだが、やっていないため、恭介のアバターはいかにも弱そうな、布の服。腰にはその辺りの百円均一のシヨップで買えそうな果物ナイフのような、貧弱な短剣がホルダーに入れている。

恭介のアバターは少し派手目な優輝とは打って変わって、少し地味な顔つきだ。ほとんどのパーツは元々デフォルメされていたもの

で、変わったものと言えば、あまりにも味気が無いので遊び心で眼鏡をつけただけだ。

『ああ。初期装備だ。だから、多分、ってか絶対弱いぞ?』

『大丈夫。心配しないで。僕が武器と防具はあげるよ。職業は?』

『馬路? ありがとう! 俺の職業はブードゥー』

『ブードゥー? そりやまたどうして……。ちょっと待って、ブードゥー用の装備はちよつと用意してなかったかも……。』

そう発言すると、暫く会話が止まる。

ブードゥーとは、このゲーム内に何種類もある職業の内の一つだ。一般的な職業と言えば、ソルジャーや、ウィザードといったあたりだろう。勿論、これらのオーソドックスな職業に加えて、アーチャーやシーフと言った少しマイナーな職業まで揃っている。

ブードゥーと言えば、そんなマイナーな職業の中でもプレイヤー人口の少ないほとんど過疎化している職業だ。それぞれの職業にはちゃんと長所と短所があり、それはブードゥーも例外ではない。

例えば、一番人気のあるソルジャーは物理攻撃力とHPの成長率が全職業中トップという長所がある。しかしそれに対して、魔法防御力と素早さが極端に低く、魔法を駆使する相手と戦うにはヒールアイテムや、ヒーラーの存在が必要不可欠である。

このように、ブードゥーにも素早さの成長率が全職業中トップという長所がある。その他の成長率も平均的なのだが、欠点としては

スキルが地味なのである。

大ダメージを与える事のスキルが無い上に、主戦力というよりもサポート向きなので、ゲーマーからは好まれないのだ。

『ああ、やっぱりブードウ用の装備は無いや。買ってくるから待ってて』

一条恭介——？

そういうと優輝のアバターが動き始め、近くにあった武器屋NPCの前で数秒止まったと思うとすぐにまた恭介のもとに戻ってくる。

すると、画面右上に並んでいるアイコンの一つが点滅する。恭介がそれをクリックすると、すぐにトレードウィンドウが開かれた。

このトレードウィンドウに渡したいアイテムや金額をお互いに入れると、それをトレードする事が出来る。勿論、無償トレードというのも可能なのだがそれにはある程度制限があり、特定のアイテムしか渡す事が出来ないとか、千円——千カム以上は渡す事が出来ないなど。

優輝のトレードアイテム欄に、なにやら武器と防具が入れられた。それを確認すると、恭介はトレードの受諾を押す。

『ごめん。まさか、ブードウー選ぶとは思わなかったからさ。ランカーしか買えないところで、一応一通りの職業の装備買ったんだけど、予想外だったよ。今渡した奴はそこらへんのショップで普通に売ってる奴だから……。あんまり強くないかもしれないけど、とりあえずそれで我慢して！』

しかしそうは言うものの、優輝が渡したのは恐らくショップで買える中でも最も高級な武器と防具だろう。今装備している、スモールダガーはATKが一上がるというものののだが、優輝の渡したオーロラスティックは何と持っているだけで、INTとATKがそれぞれ二十づつ上がるというものだ。

普通ならば中級者以上が使うものなので、二十といってもそれほど強さに大きな変化は感じないのだが、初心者が使うとなるとまた別。

二〇上がるだけでも大分、敵を倒すのが楽になる。とはいっても、やはり中級レベルになってしまうと、それを感じなくなってしまいうのだが。

『いや、別にこれでも十分。これ、新規登録のステータスにははかり高いしね……』

『そっかあ、いや恭介がそれでいいならいいんだけどね。それじゃあ、早速狩りに行こうか！ 流石にそのレベルじゃ僕がいつも狩っているところはキツイだろうし、かといって初心者がやるようなところだと弱すぎるから……』

そうチャットに打ち込まれると、少しまた会話が止まる。

恭介はゆっくりと背伸びをし、首を回す。気が付けば、秋葉から帰ってきてからずっとパソコンの前に座っている。ざっと、三時間ほどだろうか。デスクワークに慣れた人ならともかく、普段あまり使わない恭介には、かなりの疲労感が溜まっている。

本当はもう今日はこれで終わりにして、ゆっくりと休みたかった。明日は別に行きたくもない学校が、恭介を待っている。

だが、そんなどうでもいい事の為に優輝との関わりを終わらせるわけにはいかなかった。

恭介は疲れ気味な身体に喝をいれると、もう一度大きく背を伸ば

した。

『えーと、それじゃあ、下の上ぐらいのところに行こうか。そこだったら、ステータス的にも丁度良いだろうからね。でも、下の中といても初心者にはそこそこ苦戦が強いられると思うよ。まあ、危なくなったら助けるから、基本は一人で倒してみて。操作方法とかは分かる？』

『基本的なのは分かる』

『了解！ 基本的にどの職業も操作方法は同じだけど、スキルだけはそれによって効果とか範囲とか違うから注意してね。といっても初期だからデフォルトのスキルしか無いと思うけど。それじゃあ、行こうか。ワープゲートから、Freezing earthってところに行つて。先に行つて待つてるから』

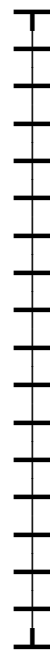
そう発言がされると、優輝のアバターが走り去っていく。

それを見ながら、恭介は装備ウィンドウを開き優輝から貰った武器と防具を装備していく。数値が大幅に上がるのを見ると、少し胸が高鳴るのを感じた。恐らく自分は今この場所にいる新規の中では一番強いだろう。そんな優越感が恭介の中に溶け込んでいく。

恭介のアバターは先ほどまでの貧相な装備から、それなりに見栄えの良いものになつていた。

白の黒い魔道服の様なものに、赤のラインが入っている。スモールダガーの変わりに装備したオーロラスティックは、不思議な石が杖の先についているシンプルな杖だ。

恭介は一応道具屋に寄って、商人NPCに話しかける。お金だけは初期のままだったので、少ない範囲内で買える安いヒールアイテムを選び数個買うと、優輝の後を追いかけてワープゲートへの道を走っていった――。



「うっわ……これまじでゲームの中かよ？」

恭介が思わず呟いた。ゲーム画面に映し出されていたのは、まるでハイビジョンテレビのような画質。それに映っている凍てついた吹雪の大地。

どういう仕組みなのか、アバターに降りかかる雪は時間が経つに連れてゆっくりと薄くなっていき、まるで溶けているかのよう。

primitive townとは違い、このFreezing earthではモンスターがポップする。今はワープゲートの近くだからモンスターを見ることは出来ない。

しかし、一度マップを動き回ればあちらこちらでモンスターがポップするのだ。

『恭介、ここは吹雪で視界が悪くなってるから、背景と同化してくる敵には気をつけてね。後、パーティ登録しておく？ 全部恭介が倒すならいいけど、もし止めは僕がやるのなら、登録しておいた方が経験地分配されるけど』

『んー、いや、別にいいや。ヒールだけ頼める？』

『ん、了解』

そう打つと、恭介はアバターを動かす。吹雪の中を一定の速さで進む。すると、数十秒もしない内に画面右の辺りに、モンスターのシルエットが現れた。

方向を変えてそれに向かって、アバターを動かす。

優輝のアバターは初めに言っていた通りアシストが目的なようで、距離は一定を保って付かず離れず。まるでお供の様にして後ろを着いて来ている。数秒経ったあたりで、ようやくシルエットが実体になり、吹雪の中でゆっくりと徘徊するモンスターだと断定した。

初めての戦闘。恭介は右手のマウスを持ち直し、左手でゆっくりとキーボードを叩いてキャラクターを動かす。右手と左手を同時に使うこのゲームは、慣れないと操作が不安定になりがちなのだが、幸いにも恭介はあまり違和感を感じることなく操作出来ていた。

図鑑で見たマンモスを感じさせるような、アバターよりも少し大きめのモンスター。その上には、ヒットポイントを表すゲージと、Rush Elephantという表記。恭介のアバターが近付くと、ターゲットしたのか向きを変える。

———来た……！

一条恭介——？（前書き）

また暫く書き溜めるので更新止まるかもです。すいません。

一条恭介――？

何時の間に発言していたのか、チャット欄には優輝が発言していた。

『そいつは、ターゲットに向かって突進してくるから気をつけて。後、あんまり戦闘が長引くと仲間を呼ぶから、なるべく早めに。もし倒すのに苦労したら、チャットで話しかけてくれればすぐに対応するから。それじゃあ、頑張ってね！』

それを流し読みすると、恭介は再びモンスターのほうに向き直る。

「あ……」

その瞬間、自分のアバターが画面の中で吹き飛ばされた。発言を読みながらも、モンスターの動きには注意していたつもりだったが、やはり注意力が散漫になっていた様だ。慣れているとはいえないので、それも当たり前なのだが。

今の動きが恐らく、優輝の言っている突進攻撃だろう。ターゲットに向かって一直線に進んでくる。一発のダメージは大きいとはいえないものの、何度も食らってしまうと危ないだろう。恭介は敵モンスターに集中する。

既に二度目の突進をしようと、予備動作に入っていた。恭介は慌ててアバターを動かして、RushElephantの一直線上から逸れる。すると、予想通りRushElephantはさっきまで居た恭介の場所に一直線に突進していた。

また予備動作に入る前に、恭介はアバターを近付かせて攻撃をする。スキルを使うと、それによってライトエフェクト等の派手な効果が付け加えられる。しかし、デフォルトの攻撃スキルにはそんなものは一切なく、木なのか鉄なのか判別出来ない微妙な乾いた音が鳴るだけ。

しかも、装備している杖を物理的に使うという何とも白けた事になっている。

だが、ダメージとエフェクトは全く関係無いので、いかに弱そうなお攻撃でもしっかりとダメージを与えている。

Rush ElephantのHPは四分の一程削られていた。やはり、優輝から貰った武器はかなり性能が良いようだ。

恭介はまた、相手の予備動作が始まるのを見計らって、一直線上からアバターをずらす。次にRush Elephantが突進したらずぐに近付き攻撃が出来るように、直線状に入らないように気をつけながら、なるべく近付く。

すると、恭介の予想に反してRush Elephantは突進をしない。その代わりに、一瞬のタメが入った後にその巨体をアイススケートの様にぐりりと一回転させた。ムチのようにしなる鼻が弧を描いて、恭介のアバターに叩きつけられる。

『モンスターの攻撃パターンは一種類じゃないから、気をつけて。って言ってももう遅いか。とにかく、油断しないように』

本当に言うのが遅い。恭介は心の中で嘆息しながら、溜息を吐いた。しかし、これで大体の攻撃パターンは読めた。

まだ他の攻撃方法がある可能性も捨てきれないのだが、恐らくはこの二つの攻撃パターンに気をつけなければいいだろう。

一直線上に入ると突進。逆に近付きすぎると、回転を使った近距離の攻撃。要は、一直線上に入らないように、近付かないようにして、まるで見当はずれな方向に突進した後の隙について攻撃を繰り返せば良いのだ。

恭介はそう頭の中で整理すると、再び真面目な顔で画面に顔を向ける。

暖房が効いた暖かい部屋に、恭介の小さな呼吸音とキーボードの音、マウスのクリック音がリズム良く刻まれていく。

——そして、一分ほどが経つと、恭介は画面の前で小さくガッツポーズをした。

画面に表示されているのは、先ほどまで元気に暴れていたはずの Rush Elephant ではなく、氷の大地に小さく浮かぶ文字列だった。

『おお、恭介倒したね！ 初戦闘初勝利おめでとー！』

『おう、ありがとう！ 優輝から貰った武器かなり強かったよ！』

『そりゃ良かった』

そこまできて、恭介は改めてフィールドを見回す。すると、そこには恭介が倒した時に出てきた戦闘の成果を示す表示が数個程点-in-していた。普通、体のモンスターを倒したときに出る成果表示は一

つなのだが、何故か恭介の周りではそれがいくつも浮いている。

『バグか？』

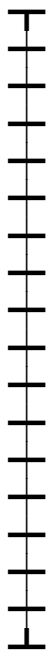
『バグ？ ああ、この表示の事ね。恭介が倒した一体以外は全部僕の成果だよ。最初に言ったでしょ？ 戦闘が長引くと仲間を呼ぶって。恭介が気づく前に僕が倒しちゃったからあれなんだけど、大体六十秒が仲間を呼ぶまでの時間なんだよね。それで、恭介がてこずってる間に寄ってきたのを、僕が適当に片付けといたってわけ』

その発言を見て、合点がいった。戦闘に不慣れで、モンスターの特徴も掴めていなかった為、てこずってしまうのは当たり前なのだが、それでも恭介の邪魔にならないようにと、優輝は影ながらアシストしてくれていたのだ。

恭介は心の中で御礼を言うと、また次のモンスターを探し出す。

遠くで蠢く新たな影。

恭介はその方向にアバターを動かすと、ゆっくりと歩行する Rusephant に狙いを定めた――。



『あ、ごめん。僕そろそろ夕飯らしいから落ちる。恭介は？』

三十分ほど経つと、唐突に優輝がそう発言した。

確かに、そろそろ潮時だろう。段々プレイヤーも増えてきて、ポ

ップされたモンスターを狩ることが困難になってきている。周りには、実に様々なプレイヤーが混在していた。勿論、所属国も違えば職業も全く違う。

流石に、優輝程の上位プレイヤーは居ないのだが、中堅プレイヤーが全体の三割ほどを占めているようだった。遠距離からの攻撃で、他人が弱らせたモンスターを奪っていくプレイヤーもちらほらと見つかる。しかし、そういったプレイヤー達は文句を言われると他のフィールドに移動してしまうので、特に対処法は無かった。

恭介は優輝の力を借りながら何とかレベルを十まで上げた。優輝のレベルが七十オーバーなのを考えると大分見劣りがしてしまうが、それでも今のフィールドのモンスターを一人でそこそこ倒せる程にはなっていた。

『了解。今日は有難う。次はいつ来る?』

『んー、どうだろ。分かんないなあ。明日からは普通に学校があるから、昼間はあるまり来れないだろうし……。まあ、とりあえずフレンド登録しとく?』

そういうと、フレンド申請が送られてくる。恭介はこれを受諾した。

フレンド登録をすることによって、ログイン中ならばフレンドと何処からでも連絡を取ることが出来る。これを使えば、二人がタイミング良くログインしていれば、ゲームの中で会うことが出来るだろう。

『よしっと。まあ、平日は大体夕方か夜中に来ると思うから。もし、

僕がログインしてたら連絡してくれば、一緒に狩りとか出来るよ！
それじゃあ、僕は落ちるから！』

すると、瞬時に優輝のアバターが消えた。ログアウトしたのだろう。

恭介は目を瞼の上からぐっと押した。程よい圧力がかかり、気持ちよい。

「さて……」

恭介もフィールドから出ると、ログアウトのボタンを押した。すると、ゲームウィンドウがトップ画面へと戻る。恭介はゲームウィンドウを閉じると、パソコンをそのままシャットダウンした。長時間ゲームをやっていたせいか、身体のあちこちが軋んでいるようだった。

恭介は立ち上がり、ベッドに飛び込む。

優輝が言っていた通り、明日は恭介にも学校がある。

あまり行きたくはないので、サボっても良いのだが、それで家にいてもどうしようもない。優輝も学校からゲームにログインは出来ないだろう。

恭介は一つ溜息を零す。

純白のシートが敷かれているベッドに顔を押し付ける。シートのひんやりとした感触が、ゲームで体温の上がった恭介には気持ち良かった。

——不意に、ドアがノックされる。

「恭介君、いますか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182x/>

――Blood Blade Online――

2011年11月13日13時19分発行